京大広報

No. 551　2000. 11

昭和基地全景 ― 関連記事本文964ページ ―

目次

〈大学の動き〉
長尾総長の連合王国訪問 ……962
長尾総長の中華人民共和国訪問 ……962
博士学位授与式 ……962
〈日誌〉 ……963
〈訃報〉 ……963
〈文化交流〉
第40次南極地域観測隊に参加して
梶川道雄……964
〈保健コーナー〉
私が適応できない大学に長居している人 ……966
〈随想〉
北欧の北　名誉教授　藤家龍雄……967
〈洛書〉
夏のロンドン　前川和也……968
〈お知らせ〉
国際公開シンポジウム
「21世紀の金融と金融工学の役割」
－京都からのメッセージ－ ……969
能楽鑑賞会 ……970

京都大学広報委員会

大学の動き

長尾総長の連合王国訪問

長尾　真総長は，９月17日から23日までの７日間，連合王国へ出張した。

この間，英国図書館ドキュメントサプライセンター（The British Library Document Supply Centre）等において両国の教育・研究の現状について意見交換を行った。また，ウォーリック大学，シェフィールド大学において，それぞれ副学長と学術交流に関して懇談を行った。

長尾総長の中華人民共和国訪問

長尾　真総長は，９月30日から10月４日までの５日間，中華人民共和国（香港）へ出張した。

この間，香港大学及び香港科学技術大学を訪問し，それぞれ学長と研究・教育について意見交換を行った。また，香港科学技術大学で開催されたコンピュータ言語学会会議に出席し，基調講演を行った。

博士学位授与式

９月28日（木）午前10時30分から，京大会館において，長尾　真総長，両副学長をはじめ，各研究科長，事務局長出席のもと，博士学位授与式が挙行された。

総長から，各授与者に対し学位記（平成12年７月24日付，９月25日付）が手渡された後，総長の式辞があり，午前11時40分終了した。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研究科	平成12年７月			平成12年９月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
文学研究科	—	—	—	2	4	6
教育学研究科	1	—	1	1	—	1
法学研究科	—	1	1	—	—	—
経済学研究科	2	4	6	1	—	1
理学研究科	5	2	7	7	2	9
医学研究科	10	—	10	6	2	8
薬学研究科	1	3	4	—	3	3
工学研究科	2	9	11	7	7	14
農学研究科	11	13	24	2	9	11
人間・環境学研究科	3	—	3	—	—	—
エネルギー科学研究科	—	1	1	3	1	4
情報学研究科	2	2	4	1	2	3
計	37	35	72	30	30	60

日誌　2000.9.1〜9.30

9月17日　総長，連合王国を訪問（23日まで）
19日　発明審議委員会
20日　国際交流委員会
〃　国際交流会館委員会
22日　同和・人権問題委員会
26日　評議会
28日　博士学位授与式
30日　総長，中華人民共和国（香港）を訪問（10月4日まで）

訃報

このたび，石田政弘（いしだ まさひろ）名誉教授，藤縄謙三（ふじなわけんぞう）名誉教授が逝去されました。
ここに，謹んで哀悼の意を表します。
以下に両名誉教授の略歴，業績等を紹介します。

石田　政弘　名誉教授

石田政弘先生は，9月25日逝去された。享年73。

先生は，昭和26年京都大学理学部植物学科を卒業後，京都大学大学院（理学部）で学ばれた。大学院在籍中を含め，昭和36年より同38年まで，米国コロンビア大学動物学部高等研究員として留学し，帰国後同38年京都大学原子炉実験所助手に採用され，同助教授を経て，同54年教授に就任，核生物学研究部門を担任された。昭和58年同附属原子炉医療基礎研究施設教授に配置換，同62年より再び核生物学研究部門を担任された。平成2年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は，細胞核DNAの微量定量，遺伝子の塩基組成，細胞内におけるDNA生合成や代謝などの先駆的研究を行い，細胞核以外の場所である光合成器官としての葉緑体にもDNAが存在することを明らかにされた。葉緑体DNAの発見は生物学研究の新分野を開拓したものである。この発見ならびにドイツの生化学者ミーシャー博士による細胞核DNAの発見（1869年）にちなんで「ミーシャー・石田賞」が国際エンドサイトバイオロジー学会によって制定されている。

主な著書に『葉緑体の分子生物学』（単著），『微生物遺伝学』（共著），『細胞生物学』（共著）がある。

（原子炉実験所）

藤縄　謙三　名誉教授

藤縄謙三先生は，10月４日逝去された。享年70。

先生は，昭和28年京都大学文学部史学科卒業，同30年同大学院文学研究科修士課程修了，同年９月同博士課程を退学して大阪府立大学教育学部助手に採用，同大学教養部助手，講師，助教授を経て，同45年に京都大学文学部助教授，同54年同教授に就任，西洋史学第一講座を担任された。平成５年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は京都女子大学教授に就任，引き続き教育と研究に励まれた。

先生のご専門は西洋史学，とくに古代ギリシア史であり，なかでもギリシア史学史の分野では，わが国で初めて本格的な研究をされ，著書『歴史学の起源』にその成果をまとめられた。また，大著『歴史の父ヘロドトス』は，古代世界を代表するこの史家の総合的な研究で，世界的にも類を見ない画期的な作品である。膨大なギリシア古典に沈潜し，優れた洞察力とみずみずしい感性でもってなされた先生の研究は，著書『ギリシア神話の世界観』，『ギリシア文化と日本文化』など一般読者も楽しめる高度でかつ平易な著作となって結実している。

先生は日本西洋古典学会，日本西洋史学会，史学研究会などの学会において永く活躍され，とくに史学研究会では理事長を務められた。

（大学院文学研究科）

文化交流

第40次南極地域観測隊に参加して

梶川　道雄

過去，京都大学からは南極地域観測隊に数多くの優秀な研究者の方々が参加してこられました。私は文部事務官として初めて，第40次南極地域観測隊の越冬隊員として参加させていただきました。私は平成10（1998）年11月，東京・晴海港を出発し，今年の３月に帰国するまでのちょうど500日間南極で過ごしてきました。

越冬隊における私の役割は，設営部門の庶務担当として，主に観測隊の運営と行動について越冬隊長を補佐し，観測隊員の連絡調整に務めることや，日本国内との連絡事務に関する窓口となることでした。しかし，実際の南極での仕事はこればかりではありませんでした。越冬隊40名の限られた人数が孤立した南極・昭和基地で１年以上も過ごして行くためには各担当を越えた助け合いが必要になります。私はパソコンに向かって事務的な仕事をするより，基地

オングル海峡に立つ筆者

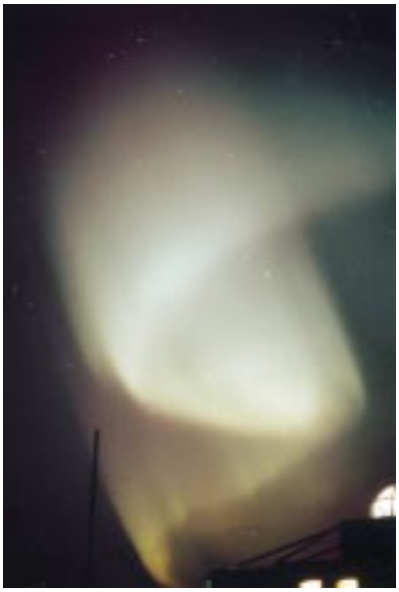
を維持するための車両・機械類のメンテナンスや，各観測のサポートなどに屋外へよく出かけていきました。全くの素人が特殊なことをすることに多少の戸惑いもありましたが，これも昭和基地ならではの事情があるためだと感じます。

昭和基地は南極大陸から４～５㎞離れた東オングル島にあり，１年中氷の海に閉ざされた場所にあります。１年に１度，海上自衛隊が保有する砕氷艦「しらせ」が昭和基地に来る以外，隔離された世界です。そんな中では，どんなことでも自分たちだけでしなければならないという意識が自然とおこり，各隊員が研究・観測に従事し，生活することが出来るのだと思います。観測隊には全国の大学，研究所や官公庁，また一般企業からもいろいろな分野の人たちが参加しています。庶務担当として，他の隊員たちとの交流の中で驚きや戸惑いも少なくありませんでしたが，いろいろなことを勉強させていただきました。このような経験が出来たことも私にとって大きな財産であり，忘れることが出来ません。

南極には世界各国の基地が数多くありますが，その中でも昭和基地は，５本の指に入るほどの近代的な設備を持っています。独身の私としては，日本で生活するより遙かに快適な空間と時間を過ごせたと感じます。衣食住の説明をすれば，基地の中では特別な衣類は必要なく，普段着のままで過ごせ，食事についてはプロの調理人により，毎食最高の食材を使って飽きの来ない食事が提供されます。また住居については，各隊員に床暖房付きの個室が与えられ，何不自由なく暮らせる環境が整っています。しかし基地の中にいれば快適ですが，屋外に出れば想像もつかないような自然を目の当たりにします。昭和基地の気温は真冬で－40℃近くにまで下がり，真夏でも０℃前後にしかなりません。しかし，私は気温の低さよりも，幾度となく経験したブリザードの方が遥かに南極の自然の厳しさを物語っていると思いました。自然についてよく聞かれることにオーロラがあります。昭和基地近辺はオーロラの観測に適しており，私は何度もオーロラを見ましたが，どれだけ素晴らしく，幻想的なものなのか言葉では説明出来ません。

日本に帰国して半年以上が経ちましたが，当時の出来事はかなり昔のことのように感じられます。現地での写真を見ても，ついこの間まで居たような実感は全く沸きません。しかし，私にとってこの500日は長いと感じさせるものではなく，ごく短期間に過ぎ去った出来事のように思います。あまりにも現実社会とかけ離れた所にいたからそう感じるのかも知れません。南極についてもっと多くの人が興味を持ってくださることを望んで私の経験を伝えさせていただきました。最後にこういった機会に恵まれたことに大変感謝しています。

（かじかわ　みちお　総務部企画課）



昭和基地上空のオーロラ

保健コーナー

私が適応できない大学に長居している人

久しぶりに母校にまた通うことになった。しばらく短大や女子大で仕事をしていた私は，４月当初は男性だらけのキャンパスに目も耳も皮膚も驚きっぱなしだった。しかし同時に，そこかしこに級友がいるような気がして，目が知らず知らずに居るわけのない友人を捜していた。長く学んだキャンパスの，場というものの持つ力に，心をゆらゆら動かされていたのだった。

カウンセリングセンターで出会う学生たちは，一応後輩にあたることになる。したがって，相談の中に講義室名が出てくれば部屋の様子が分かり，大学祭の準備と言われればおよその見当がつき，近隣のあの喫茶店でこんなことが起こったと言われれば店の雰囲気までつかめる。彼や彼女らの生活圏と，昔の私の生活圏が重なって共有しているという感覚が存在している。場の力なのか，こちらが持っているそういう感覚が学生にも伝わっているのか，学生からもあえて「卒業生ですか？」と言葉に出して問われることは今までのところないが，「生活圏のことはよく通じる，きっと卒業生だろう」という前提のもとに話が進められているな，と私が感じることは多い。

私は前任の女子大でも，やはり同じように，女子学生から「卒業生だろう」の前提のもとに相談を受けていた。しかしどうも生活圏の話の通じが悪く，卒業生ではないと学生が知ったとき，来談した学生の持つ問題によって，その事実への反応が異なったのだった。来談した学生が，就職活動などその女子大学卒になることに問題のウエイトを置いている場合，卒業生でないカウンセラーは，とりあえずその学生の求めていたであろうモデルからスパッとはずされた。また，学生が自分のいる女子大の生活に適応し切れていないことを問題にしている場合，カウンセラーに対して「私が適応できない大学に何でこの人は長居できるんだろう？」といった疑念から始まり，カウンセラーが卒業生でないことを知ると，どこかホッとし，大学の中の少数派，少しずれたモデル，のイメージを投げかけてこられた。それは学生にとって大学に適応できない自分自身のイメージでもあると思われる。

この経験をもとに現状を振り返れば，自分の慣れ親しんだ環境で，卒業生の空気をまとってカウンセラーをしていると，それが事実であるだけに，学生が投げかけているであろう様々な卒業生イメージについて鈍感になりやすいことがわかる。本学でも当然大学生活に適応できていないと感じている学生は多い。不本意入学の学生もおり，また，他大学の学部から本学に学士入学したり大学院に入学したりしている場合は，希望して来たとはいえ「転校生」の状態になるので苦労することも多い。彼や彼女らが疎外感を訴えるとき，その背後に「私が適応できない大学に長居している人」というイメージが良くも悪くも存在しうることを忘れがちになるのである。これに鈍感すぎると，来談当初の学生の「いわれのない」攻撃的な話し方やきつい表情や投げやりな気持を，より正確に理解することが難しくなるかもしれない。もちろんカウンセリングの経過はこの当初のイメージだけに縛られるわけではない。「その大学にいる」ことだけがモデルとなるのではなく，それ以外の面を取り込んでいこうとする独自の経過をたどるように思う。

むしろ学生にとって今後の人生のモデルを提供しているのは，研究室などの教育現場で日々接する諸先輩方であり，その役割は大きいと言える。どこかずれて困っている青年期の学生は，モデルにしたい人間とどこかは重なっていないと不安なものである。重なっているところはあるか，ずれている感覚はどこか，などと，学生の人生のモデルとしての自分をたまに振り返って見るのも，教育者の仕事ゆえの面白さかもしれない。

（カウンセリングセンター講師　中川純子）

随想

北欧の北

名誉教授　藤家　龍雄

ヨーロッパ最北の岬ノールカップを訪れたことがある。ヘルシンキから北上して，ラップランドのイヴァロに至り，そこから路線バスでノルウェーとの国境を越えて目的地に向う行程であった。最初バスは針葉樹林の中を，放牧のトナカイを避けながら走っていたが，林相はカバノキやヤナギの類に変り，それもいつしか矮小化して，荒涼たる台地と化してゆく。しかも路面は，氷期にこの地方を分厚く覆っていた氷床の擦痕であろうか，何本もの水無川のような地形を横切るので，時には果てしないジェットコースターのようになる。しかし，ノルウェーに入ると，やがてこの台地も絶えて，バスは急速にフィヨルドに向って下ってゆく。

ノールカップに行けば，本当に“地の果て”をみたという気分になるのでしょうとヘルシンキの友人が云っていた。その地点に向って，バスは再び広い台地をゆっくりと登り，茫漠とした風景と長い時間の末に停車した。地に降り立って数十米歩くと，そこは陸と海との境であった。

何という凄まじい断絶！台地は400mの垂直の断崖となって海に切れ落ち，そこから海は島影もなく，びょうびょうとして北に拡がり，はるか彼方の水平線でぼんやりと空に溶け込んでいた。寒々とした風が吹き，足許には氷雪に削られた断崖が凄まじい切口をみせている。たしかに“地の果て”という以外に言葉のない，深沈とした孤独を感じさせられる。

崖を離れて，海とは反対の方向に歩いてみて，思いがけずチョウノスケソウの群落をみつけた。スイスや日本の高山でよく見かける花にこうした場所で出会うと，やはりなつかしい気持ちを覚えるものである。そして，後に図鑑等で，この植物すなはち Dryas　octopetala が最終氷期末の Dryas 期に関連するものであることが分ると，また旅行の新しいモチーフが見つかったと喜んだ次第である。

ノールカップを離れて，船でノルウェーの西海岸を南下し，ロフォーテン諸島を訪れた。ここは，フィヨルドが実に美しい風景を形成している。南部の長大なフィヨルドの景観に比べて，氷河は如何に繊細に岩を削り，磨き上げて美しい山を造ったことかと驚かされるが，その最たるものがキルケフィヨルドである。ピラミッドあり，聖堂あり，空に向って振り上げた蟹のハサミがある。そして，それぞれの岩峰は，フィヨルドの海面に向けてゆるやかな曲面を落下させ，U 字谷を形成しているようである。

むかし，伝説の巨人トロールが，山ばかりのノルウェーのためにフィヨルドを掘り，岸辺の僅かな平地に人々は家を建てて住みついたという。それはフィヨルドによく見られる風景であるが，キルケフィヨルドでは，そのボトムに当る所に僅かにゆるい傾斜地があって，10軒ほどの家が建ち小さな定期船が通ってくる。

９月，傾斜地の上部はコケモモやブルーベリーやガンコウランの実の赤，青，黒の色が溢れていた。ツンドラ植物達の厳しい生活史の中の華やいだ一場面ということなのだろうけれど，そんなある日，船着場に数人の老女が佇んでいた。友を迎えるのか，見送るのか。船が到着し，やがて去ってゆくと，彼女らは思い思いに自分の家の方へ帰って行った。花柄の衣服を風にはためかせながら黙りこくって歩くさまは，ノールカップの台地で，花辨を風になびかせながら揺れていたチョウノスケソウを思い起こさせるものであった。

美しさと寂しさとを織り混ぜて，動くともみえずゆっくりと時が流れていくように思えるのは，単に私の旅情であろうか。

（ふじいえ　たつお　元総合人間学部教授
平成６年退官，専門は数学）

洛書

夏のロンドン

前川　和也

土地の人びとがどういうふうに言うのかは知らないけれども，わたしの「ロンドンの夏」は，七月初旬，ウィンブルドンでのテニス・トーナメントがおわる頃にはじまり，八月末の休日バンク・ホリデイでおわる。この20年，わたしは大英博物館で古代メソポタミアの粘土板記録を手写してきたのだが，滞在したのは，たいていの場合，「ロンドンの夏」のうち５週間程度だった。だから，わたしがロンドンについて抱く具体的なイメージは，この時期に限定されている。

街なみの変容，人びとの暮らしぶりの変化については，「夏のロンドン」の定期観察だけでおおくを知ることができる。この20年で，ロンドン中心部の街なみは，まるでかわってしまった。レンガ造りの建物がつぎつぎに消え，新様式のビル街に変容したのである。もっとも極端な変化は，グリニッジにいたるまでのテムズ南岸地域におこった。たとえば，サウスワーク地区からウェストミンスター橋までの南岸を歩いてみよう。ここには斬新なスタイルの集合住宅ビル群とならんで，シェクスピアのグローブ座，テイト・ギャラリーの分館，はては水族館，大観覧車までできあがった。

ここ数年のうちに，ロンドンの中心部で，いたるところにカフェができた。レストランでは，はじめてテーブルと椅子とを歩道にならべるようになった。そしてパブで，午後ずっとアルコールが飲めるようになった。パブではフォースターやハイネケンがよく売れるようになった。もはや繁華街で，日曜日に店を閉めるところなど，ほとんどなくなってしまった。大手のスーパーマーケットに入るだけで，この20年間で人びとの食生活がまるでかわったこと，また英国経済と EU 経済とが，いまやいかに密接に結びついたかを，実感できる。

「夏のロンドン」は，青空のもと観光客と学生でわきかえっている。ところで，10年ほど前から，「夏のロンドン」の極端な国際化がはじまった。まず，しばしばイタリア語を耳にするようになった。イタリア人学生が，英語を勉強するために，大挙してやって来はじめたのだ。そして約５年前から，国籍の見当がつかない旅行客と学生，そして韓国人団体客が急速にふえてきた。最後に，ここ数年，若い日本人同士が，あらゆる場所で日本語を声高に話すようになった。「夏のロンドン」では，（フランス語いがいの）さまざまな外国語とさまざまなタイプの「英語」がとびかっていて，土地の人びともそれを容認しているようにみえる。いまや「夏のロンドン」は，英国の首都というより，コスモポリタンな集合体に変容しているようにみえる。

では秋になると，これらの外国人たちはロンドンからはなれ，ロンドンは静かになるのだろうか。秋でも冬でも，サウスワークからウェストミンスター橋までのテムズ南岸は，人びとであふれているのだろうか。ロンドンは，英国の首都にもどっているのだろうか。わたしは，よく知らないのだ。

（まえかわ　かずや　人文科学研究所教授）

お知らせ

国際公開シンポジウム「21世紀の金融と金融工学の役割」
── 京都からのメッセージ ──
〔金融技術戦略と知的ベースの拡大を求めて〕

京都大学では，平成12年４月経済研究所に「金融工学研究センター」，経済学研究科に「ファイナンス工学講座」が設置され，この分野における重要な研究拠点を築くことができました。このことを記念して，国際公開シンポジウム「21世紀の金融と金融工学の役割」を日本経済新聞社の協力を得て，東京と大阪で開催することになりました。

会期・会場：〔東京会場〕12月12日（火）
一橋記念講堂　東京都千代田区一ツ橋2-1-2
〔大阪会場〕12月13日（水）
MID シアター　大阪市中央区城見2-1-61（大阪ビジネスパーク内）

受講：無料　各会場定員　500人（先着順）

〈プログラム〉

総合司会：経済学研究科教授　西　村　周　三

13：30　開演・挨拶
総　長　長　尾　　真
日本経済新聞社代表取締役社長　鶴　田　卓　彦

13：50　講演「21世紀の金融と金融工学の役割」
ハーバードビジネススクール教授（1997年ノーベル経済学賞受賞者）
ロバート・C・マートン　〔東京・大阪〕

15：00　パネルディスカッション
司会：経済研究所教授，国立情報学研究所副所長
佐　和　隆　光　〔東京・大阪〕
「金融リスクマネジメント」
経済研究所附属金融工学研究センター長　刈　屋　武　昭　〔東京・大阪〕
「金融リスクの統合化に向けて」
東京都立大学経済学部教授　木　島　正　明　〔東京・大阪〕
「金融工学と保険料計算原理」
筑波大学大学院経営システム科学専攻助教授　岩　城　秀　樹　〔東京〕
「証券と金融工学」
野村証券金融研究所投資技術研究部長　加　藤　康　之　〔東京・大阪〕
「保険と金融工学」
東京海上火災保険企業商品業務部次長　江里口　隆　司　〔東京・大阪〕
「証券投資における金融工学の役割と実際」
日本生命保険資金証券部長　川　北　英　隆　〔大阪〕

17：10　閉会の辞
経済学研究科長　本　山　美　彦
経済研究所長　藤　田　昌　久

申込み方法：下記 URL からインターネットでお申込みいただくか，参加会場（東京 or 大阪），氏名，勤務先，所属，役職，受講券送付先郵便番号，住所，TEL，FAX，e-mail を明記の上，FAX またはハガキで事務局にお申込みください。

問い合わせ・申込み：「21世紀の金融と金融工学の役割」事務局
〒101-0052　東京都千代田区神田小川町3-9-2　共同ビル４F
TEL. 03-5281-1576　FAX. 03-5281-1566
e-mail : fe-kyoto@twc.co.jp
URL : http : //www.nikkei.co.jp/fe-kyoto

能　楽　鑑　賞　会

課外教養行事の一環として，日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を下記のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれては，是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

来場をお待ちしております。

記

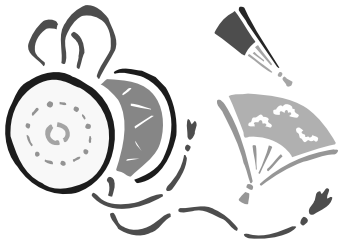
日　　時　12月14日（木）
午後６時00分開場
６時30分開演
（開演後の入場はご遠慮願います。）
８時30分終演予定

会　　場　京都観世会館
京都市左京区岡崎円勝寺町44　☎771-6114
（東山仁王門を東へ約300メートル）

演　　目　狂　言「素袍落（すおうおとし）」　茂山　千作
茂山　正邦
他
能　楽「藤戸（ふじと）」　片山　九郎右衛門
福王　和幸
他

定　　員　550人（先着順）

入場無料　入場の際は，学生証または職員証等を呈示してください。

問い合わせ先　学生部学生課課外教養担当　☎753-2511

※プログラムは，当日会場で配布します。